奈良教育大学紀要　第56巻　第１号（人文・社会）平成19年
Bull. Nara Univ. Educ., Vol. 56, No.1 (Cult. & Soc.), 2007

ショパン作曲《Etudes op.10》における指使いの変遷
－ショパンの自筆譜から現代のエディションまで－

前　田　則　子・多　田　純　一*
奈良教育大学音楽教育講座
（平成19年５月７日受理）

Alterations of the Fingering of 《Etudes op.10》 Composed by Chopin
－ From Autographs by Chopin to Current Editions －

Noriko MAEDA and Junichi TADA*
(*Department of Music Education, Nara University of Education, Nara 630-8528, Japan*)
(Received May 7, 2007)

Abstract

Works of Chopin (Fryderyk Franciszek Chopin, 1810~1849) have been loved by and familiar with many people. Those whoever aim at pianists have also studied his works. Actually his music has been numerously published until now. In his lifetime, there are both his autographs and copies by his pupils. His first editions were published in France, German and Great Britain. After his death, many manuscripts have been edited in the world. Thus these editions brought about differences in various ways. As for fingering, revisers often added numbering to play well.

The fingering is important for players since it influences their playing. There are several ways of fingering in a passage, and it changes not only quality and vibration of a sound but also expression of the fraise. Furthermore, it is necessary to propose suitable fingering for each person since individual hands and fingers are different in size.

In the last autumn, we happened to obtain a photocopy of “Etudes op.10” in Warsaw that is one of the autographs of Chopin on which he himself made notes. In this study, we examined the fingering presented by Chopin himself and revisers in the entire parts of “Etudes op.10”, and followed the alterations. From these verifications, we discuss relevancy between the fingering and piano-playing, and also significance of the fingering by Chopin.

Key Words： Chopin, Etudes op.10, Fingering, Autographs, Edition

キーワード： ショパン、エチュードop.10、指使い、自筆譜、エディション

* 大阪大学大学院研究生

1. はじめに

ショパン（Fryderyk Franciszek Chopin, 1810～1849）の作品は多くの人々に愛され親しまれてきた。そしてピアニストをめざす人が必ず勉強するものである。これまでに出版された楽譜は数多くあり、ショパン自ら手を入れたものから校訂者たちによるものまで様々な違いが生じている。その中で指使いに関しては、校訂者が学習者のより良い演奏のために指番号を書き加えたものが多く見られる。

指使いは演奏者にとって、自身の演奏を左右する重要な鍵を握っている。1つのパッセージには何通りかの指使いが考えられるが、指使いによって音の質や響き方、フレージングなどの表現が変わってしまう。また個人差のある手や指には、それぞれに合う指使いを考える必要がある。学習者が初めて楽譜を見て弾く時、音符に付られた指番号をそのまま音と共に取り入れ、習慣になることが多いため、版による影響は大きい。また練習を重ねる間には、作曲者の意図した音色や表現を考え、指使いの選択に迷うこともある。数多く出版されている版をどのように選択したらよいのか難しい問題である。

1949年のショパン記念祭、1960年の第1回国際ショパン学会議が開かれたことによって、ショパン研究が発展しそれまでの成果が集約された。楽譜についても、現在各国で広く使用されているポーランドのPaderewski版（Kraków, 1949～1961）がショパンの自筆原稿や初版本に基づいて編集された。作曲者の意図から外れていないという点で信頼されている版であるが、原典版ではない。原典版が注目される20世紀後半にはさらに研究が進められ、Henle版（München, 1956～1990）、Wiener Urtext版（Wien, 1973～1986）、そしてEkier版（Kraków, Warszawa, 1967～）が出版される際に、やっとショパンの指使いが明記されることになる。指使いに関する資料と演奏に適した指使いの種類は、殆ど揃ったといえるであろう。

本論では、ピアニストが必ず勉強しなければならない曲集の1つであるショパン作曲Etudes op.10を取り上げ、各曲ごとにショパン自身による指使いと校訂者たちによる指使いを調査することにより、指使いの変遷を明らかにする。そしてショパンのピアノ演奏法と指使いの関連性を考察することにより、ショパンによる指使いの意義を探る。

2. Etudes op.10の楽譜

Etudes op.10は1829～1833年にかけて作曲された[1]。19才のショパンはその頃2つのピアノ協奏曲op.11, op.21を作曲していた。協奏曲の中に演奏技巧を駆使する様々なパッセージを取り入れていく過程で、ピアノ演奏に関する諸問題への興味が刺激された。新しい技術の可能性を模索し、彼自身の演奏技巧を高めるためにExercise（指のための訓練）を書き始めたものがEtudesとして完成された。その自筆譜には殆ど指番号が書かれていない。当然ショパン自身が使い慣れている自然な指使いで、ショパン独自の音色を奏でていたであろう。1833年にフランス、ドイツ、イギリスで初版が出版される際に指番号が書かれ、初版楽譜を用いて弟子たちに弾かせる時に書き加えられるなど、生存中にも何種類かの楽譜が存在した。ショパンの楽譜資料については、これまでにBrown（1972）、Kobylanska（1977、1979）、Chominski & Turlo（1990）により出版された3種類のカタログ[2]から、現在どのような資料が存在するのかを確認することができる。

2. 1. ショパン生存中の楽譜

2. 1. 1. 自筆譜及び筆写譜

昨年秋に、《Etudes op.10》の自筆譜を写真撮影することができた。全12曲のうち半数の6曲は、完成した自筆譜が現存しており、ワルシャワのショパン協会（TOWARZYSTWO im. FRYDERYKA CHOPINA）所蔵となっている。コピーを入手するため国内の図書館を通じて複写を当協会に依頼したが、返事がいっこうに得られなかったため、直接ショパン協会を訪問することにした。訪問してわかったことであるが、筆者が依頼したリストは確かにショパン協会に届き受理されていたものの、順番待ちの状態となっていた。ショパン協会会長Kazimierz Gierzod教授の面接を受け、ようやくショパン協会の資料室への入室許可を得ることが出来た。自筆譜の現物は公開されておらず、厳重に保管されている自筆譜の写真を撮影させて頂くことができた。それは以下の4つの資料である。

※《Etudes op.10 No.3, 5, 6, 8, 9, 10》完全な自筆譜（資料1はNo.5の冒頭部）

※「Exercise」と書かれた《Etude op.10 No. 1》《Etude op.10 No.2》の筆写譜。Józef Linowski による写譜とされる。

※《Etude op.10 No.2》初期の段階の自筆譜

※《Etude op.10 No.4》最終的に完成していないスケッチ

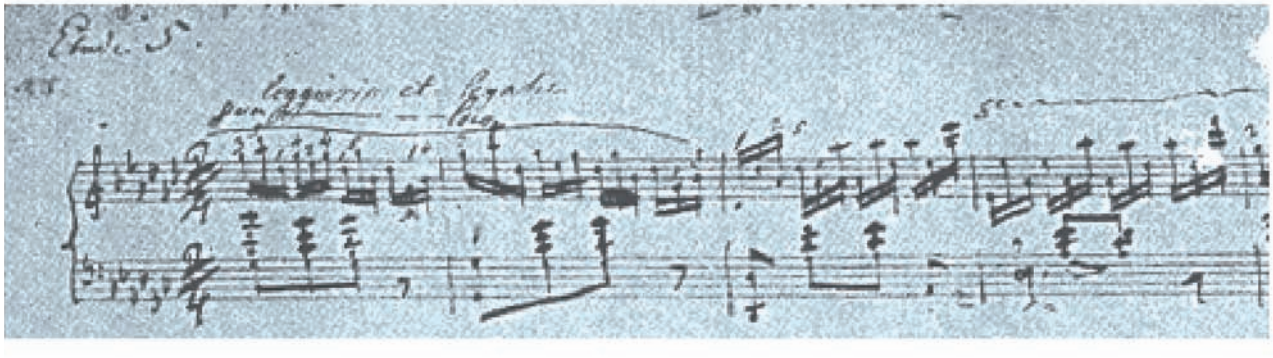
その他に以下の資料が現存している。

※《Etude op.10 No.3》《Etude op.10 No.9》最終的に完成していない下書きの原稿（The Pierpont Morgan Library, New York所蔵）

※《Etude op.10 No.7》完成した自筆譜（The Pierpont Morgan Library, New York所蔵）

※《Etude op.10 No.11》《Etude op.10 No.12》完成

資料1：《Etude op.10 No.5》の自筆譜



した自筆譜（Stiftelsen Främjande, Stockholm所蔵）

2．1．2．初版譜について

ショパンは完成した作品をフランス、ドイツ、イギリスの3出版社にほぼ同時に送っている。以下はEkierによる出典報告[3]を和訳しまとめたものである。

フランス初版（以下FEと記し、第1版等の数字は右に付する）

FE1：Schlesinger, Paris, 1833.6
自筆譜に基づく。ショパンによる詳細な訂正が３度以上行われた。

FE2：Schlesinger, Paris,
FE1の第2回刷り。おそらくショパンによっていくつか修正された。

FE3：Lemoine, Paris, 1842.12
FE1の第3回刷り。出版社が変更。FE2と楽譜上の違いはない。

ドイツ初版（以下GEと記す）

GE1：Kistner, Leipzig, 1833.8
ショパンの最終修正がないFE1の校正刷りに基づく。多くの補足変更が印刷の過程で差し込まれたが、校正でショパンの関与が確認された論証がなく、GE1の真実性は疑わしい。6曲ずつ2巻分冊。

GE2：Kistner, Leipzig, 1840年以降
GE1のいくつかのミス訂正と多くの任意の補足と変更を含む。

GE3：Kistner, Leipzig, 1845年頃
連続的な任意の変更といくつかの誤りが含まれる。

ショパン没後の1865年以降に、第4版と第5版が僅かな変更を伴いつつ出版されている。

イギリス初版（以下EEと記す）

EE1：Wessel, London,
EE1の複写は見つかっていない。おそらくFE1に基づく。6曲ずつの2巻。

EE2：Wessel, London, 1836～1839
EE1の第2回刷り。基本的にFE1の複写。多くの誤りがみられる。

1856年以降、第3版がミス訂正と補足（部分的にGE3を基に）を加えて出版された。

初版についての資料は以上である。Schlesinger社(Paris)と Kistner社(Leipzig)の出版社間の通信記録からわかっているのは、ショパンは直接的な接触をSchlesinger社とのみ維持していたことである。FEは作曲者自身が何度も修正した跡がわかるが、GEと EEは修正以前のFEを基にしたものであることから、FE2およびFE3がショパンの最終的な意図に沿ったものとみなされる。

なお、《Etude op.10 No.2》についてはフランス初版の校正版が現存しており（Bibliothéque de l`Opéra所蔵）、今回コピーを入手することができた。曲全体にショパンが指使いを書き込んでおり、ショパンの筆跡を知ることができる貴重な資料である。資料2はその1部分である。

2．1．3．弟子たちの楽譜について

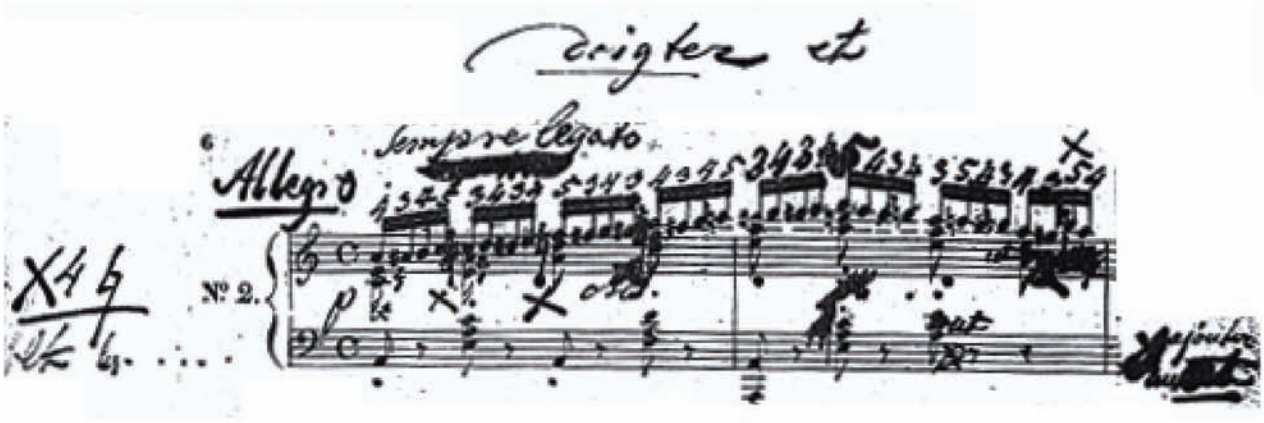
1832年よりショパンはパリで生活収入を得るためにピアノの個人レッスンを行っていた。1日に5人程レッスンをしていたと言われる。Eigeldingerの著書[4]によると、数回レッスンを受けただけの人を含めると、弟子の数は少なくとも150人に及ぶという。貴族の令嬢から、ピアニスト志望者までさまざまであったが、ピアニストとして名を残した者は殆どいない。ショパンはレッスンの際、弟子の楽譜に多くの書き込みを残している。指使いや音の高さの変更、時には曲の途中を大きく×印で消してしまうこともあった。Chominski & Turloのカタログおよび Eigeldingerの著書には、以下の7人の弟子の楽譜にショパンによる書き込みがあると紹介されている。

Ludowika Jedrzejewicz（ショパンの姉）の楽譜
：FE2（ショパン協会所蔵…自筆譜と一緒に撮影）

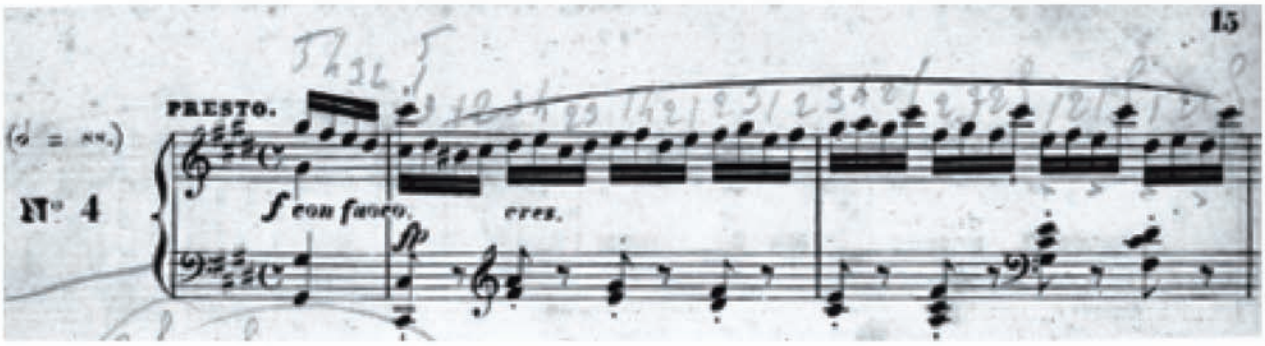
Jane Stirlingの楽譜：FE2
（フランス国立図書館所蔵…コピー入手）

Camille Duboisの楽譜：FE3

資料2：《Etude op.10 No.2》のFE校正版（ショパンが指使いを書き込んだ）



資料3：《Etude op.10 No.4》Zaleska=Rosengardtの楽譜（ショパンの筆跡ではない）



（フランス国立図書館所蔵…コピー入手）

Zaleska=Rosengardtの楽譜：おそらくGE1

（パリ・ポーランド文芸図書館Biblioteka Polska de Paris所蔵・・・コピー入手）

Napoleon Ordaの楽譜: FE1

（ショパン協会所蔵・・・未入手）

Maria Szczerbatowの楽譜:《Etudes》はなし

（ハーバード大学ホートン図書館Harvard University, the Houghton Library所蔵・・・未入手）

Auguste Franchomme: おそらくFE2

（Franchommeの末裔による個人所有・・・未入手）

この7人の楽譜の中で、特にショパンによる書き込みが多く、原典版作成の資料になることが多いのが、上3人の、Jedrzejewicz、Stirling、Duboisの楽譜である。

Zaleska=Rosengardtの楽譜にある書き込みは、筆跡がショパンのものでないため、Zaleska=Rosengardtが考え出した指使いである可能性が高いが、ショパンがレッスンで指示したものを彼女が書き込んだ可能性もなくはない（資料3）。

残る3人の楽譜であるが、Chominski & Turloのカタログ、Eigeldingerの著書共に OrdaとSzczerbatowの《Etudes op.10》に関しては書き込みがないとしており、《Etude op.10 No.3》に書き込みがあるとされるFranchommeの楽譜は個人所有のため入手することが不可能であった。

2．2．ショパン没後の楽譜について

ショパン没後の19世紀後半に出版された楽譜の特徴は2つの方向に分かれた。ひとつは校訂者の考えを楽譜に反映させる方向で、指使いやペダリングの指示、スラーや異名同音記載の変更、時には音の高さの変更などもみられる。この時代の演奏家が演奏者の立場から、より弾き易く、より美しく音響化するために加筆、訂正を行った実用版である。その代表としてKlindworthの版がある（3.にて紹介）。もう一方は作曲者の意図を忠実に再現しようとする方向であり、BrahmsやLisztらによって編集された『Friedrich Chopin's Werke』がその代表的なものである[5]。ショパンの弟子であるMikuli[6]もEtudesを校訂しており「ショパンの指示を示した」と序文に説明しているが、今日ではこのMikuli版も加筆が多いとされている。

Chominski & Turloのカタログでは、これまでに出版されたショパン作品に関する楽譜が紹介されている。全集を出版した出版社は53社あり、この中には複数の全集を出版している出版社もある。また選集は150以上にも及び、これまでにどれ程の《Etudes op.10》が出版さ

表1

	出版年	校訂者	出版社	都市
1.Kl-ed	1873年頃	Charles Klindworth	Bote &.Bock	Berlin
2.Mi-ed	1879年頃	Karol Mikuli	Kistner	Leipzig
3.Sc-ed	1879年頃	Herrmann Scholtz	C.F.Peters	Leipzig
4.Pu-ed	1902年頃	Raoul Pugno	Universal Edition	Wien
5.Do-ed	1904～1908年頃	Anton Door	Aug Cranz	Leipzig
6.De-ed	1915年	Claude Debussy	Edition Durand et Cie	Paris
7.Co-ed	1915年	Alfred Cortot	Edition Salabert	Paris
8.Fr-ed	1916年	Arthur Freidheim	G.Schirmer	New York
9.Br-ed	1923年～1926年	Attila Brugnoli	Ricordi	Milano
10.Ca-ed	1946年	Alfred Casella	Ricordi	Milano
11.Pe-ed	1948年	Herrmann Scholtz Bronislaw v. Pozniak	C.F.Peters	Frankfurt
12.Pa-ed	1949年	Ignacy J.Paderewski	Polskie Wydawnictwo Muzyczne	Kraków
13.Kr-ed	1951年	Leonid Kreutzer	音楽之友社	東京
14.Ig-ed	1951年	井口基成	春秋社	東京
15.Ze-ed	1956年	—	全音楽譜出版社	東京
16.Sk-ed	1973年	Paul Badura-Skoda	Musikverlag Ges.m.b.H & Co.,K.G	Wien
17.Ya-ed	1979年	山崎孝	全音楽譜出版社	東京
18.Zi-ed	1983年	Ewald Zimmermann	G.Henle Verlag	München
19.Ek-ed	1999年	Jan Ekier	Polskie Wydawnictwo Muzyczne	Warszawa
20.Az-ed	2006年	東貴良	音楽之友社	東京

れたのか正確な数を調べることは非常に困難である。またそのほとんどが絶版となっているため入手することが難しい。

2．3．日本国内版の楽譜について

日本国内で出版されている楽譜は2種類に分かれる。1種類目は海外で出版された楽譜を日本語に翻訳して出版したもので、パデレフスキ版、ウィーン原典版、コルトー版やクロイツァー版等が挙げられる。内容は海外の出版社と同様である。2種類目は日本の出版社が編集したものや、日本人が校訂して日本の出版社から出版したもので、全音楽譜出版社、音楽之友社、春秋社からほぼ全集に近い形でショパン作品が出版されている。校訂者による指使い等の加筆が多く見られるのは春秋社の井口版である。全音楽譜出版社からは1956年に出版されたものに加えて1979年、新たに『原典版』が山崎の校訂により出版された。「この楽譜には、ショパン自身の指使いで初版に印刷されたもののみ載せた」とされており、詳細な解説が掲載されている。また2006年には音楽之友社より『New Edition』がショパン協会国際連盟の協力のもとに出版された。FEを基盤に、弟子 Duboisの楽譜に書かれた指使い等を資料に加えている。ショパン自身による指使いはローマン体で、編者による指使いはイタリック体で記載するというように、厳密に記載方法を分けている。このように日本国内でも時代を経るにつれ、原典版重視が反映されていることがわかる。

3．Etudes op.10の指使い

これまでに挙げた楽譜に書かれた指使いについて比較を行う。考察に使用する楽譜はすべて番号付き略記名で記す。

ショパン生存中の楽譜にはローマン数字を付ける。

Ⅰ.A…完全な自筆譜（Autograph）No.3, 5, 6, 8, 9, 10
Ⅰ.CL…Józef Linowskiによる筆写譜No.2のみ
Ⅰ.Ae…初期の段階の自筆譜No.2のみ
Ⅰ.P…フランス初版の校正版
Ⅱ.FE 2 …初版譜（2.1.3.における考察よりショパンの最終的な意図に沿ったFE2を採用）
Ⅲ.FE-D…弟子Duboisの楽譜
Ⅳ.FE-S…弟子Stirlingの楽譜
Ⅳ.FE-J… 弟子Jedrzejewicz の楽譜
Ⅵ.GE-Z…弟子Zaleska=Rosengardtの楽譜

ショパン没後に出版された楽譜のうち20冊のエディションを入手することが出来た。算用数字を付けた略記名で表1に紹介する。

次に、これらの楽譜について各曲の冒頭1～2小節もしくは1～4小節の指使いを表2-1から表2-12にまとめる。ショパンと校訂者の両方の指使いが載せられている場合は、ショパンの指使いに対して（chopin）と記載した。

表2－1

	op.10 No.1 第1小節目、第2小節目（右手）	
Ⅰ.CL	記載なし	
Ⅱ.FE2	1 2 4　5 1 2 4　5	
Ⅲ.FE-D	書き込みなし	
Ⅳ.FE-S	書き込みなし	
Ⅴ.FE-J	書き込みなし	
Ⅵ.GE-Z	書き込みなし	
1.Kl-ed	1 2 4　5 1 2 4　5	1　5
2.Mi-ed	1 2 4　5 1 2 4　5	5 4 2 1
3.Sc-ed	1 2 4　5 1 2 4　5 1　4　5 1　4	5 4 2 1　5　5　5
4.Pu-ed	1 2 4　5 1 2 4　5	5 4 2 1　5
5.Do-ed	1 2 4　5 1 2 4　5	
6.De-ed	1 2 4　5 1 2 4　5	5 4 2 1　5　1　5
7.Co-ed	1 2 4　5 1 2 4　5　1 2 4	5 4 2 1
8.Fr-ed	1 2 4　5 1 2 4　5	5 4 2 1　5
9.Br-ed	1 2 4　5 1 2 4　5 1　4　5 1　4	5 4 2 1　5　5
10.Ca-ed	1 2 4　5 1 2 4　5 1　4　5 1　4	5 4 2 1　5　5　5
11.Pe-ed	1 2 4　5 1 2 4　5 1　4　5 1　4	5 4 2 1　5　5　5
12.Pa-ed		
(chopin)	1 2 4　5 1 2 4　5	
13.Kr-ed	2 1 2　4 2 1 2　4 2	4 2 1 2　4 2 1 2
	(1 2 4　5 1 2 4　5	5 4 2 1　5 4 2 1　5)
14.Ig-ed	1 2 4　5 1 2 4　5 1　4　5 1　4	5 4 2 1　5　5　5
15.Ze-ed	1 2 4　5 1 2 4　5 1　4　5 1　4	5 4 2 1　5　5　5
16.Sk-ed		
(chopin)	1 2 4　5 1 2 4　5	
17.Ya-ed(chopin)	1 2 4　5 1 2 4　5	
18.Zi-ed		
(chopin)	1 2 4　5 1 2 4　5	
19.Ek-ed		
(chopin)	1 2 4　5 1 2 4　5	
20.Az-ed		
(chopin)	1 2 4　5 1 2 4　5	

表2－2

	op.10 No.2 第1小節目から第4小節目（右手上声部）			
Ⅰ.CL	記載なし			
Ⅰ.Ae	4 3 4 5			
Ⅰ.P				5 4 5
	4 3 4 5　3 4 3 4　5 3 4 3　4 3 4 5	3 4 3 4　5 4 3 4　3 5 4 3　4 3 5 4	3 5 3 5　4 3 5 4　3 4 3 4　3 4 5 4	3 4 3 4　3 4 3 4　3 5 4 5　4 5 4 3
Ⅱ.FE2				5 4 5
	4 3 4 5　3 4 3 4　5 3 4 3　4 3 4 5	3 4 3 4　5 4 3 4　3 5 4 3　4 3 5 4	3 5 3 5　4 3 5 4　3 4 3 4　3 4 5 4	3 4 3 4　3 4 3 4　3 5 4 5　4 5 4 3
Ⅲ.FE-D	書き込みなし			
Ⅳ.FE-S	書き込みなし			
Ⅴ.FE-J	書き込みなし			
Ⅵ.GE-Z	書き込みなし			
1.Kl-ed	4 3 4 5　3 4 3 4　5 3 4 3　4 3 4 5	3 4 3 4　5 4 3 4　3 5 4 3　4 3 5 4	3 5 3 5　4 3 5 4　3 4 3 4　3 4 5 4	3 4 3 4　3 4 3 4　3 5 4 5　4 5 4 3
2.Mi-ed	4 3 4 5　3 4 3 4　5 3 4 3　4 3 4 5	3 4 3 4　5 4 3 4　3 5 4 3　4 3 5 4	3 5 4 5　4 3 5 4　3 4 3 4　3 4 5 4	3 4　4　3 4 3 4　3 5 4 5　4 5 4 3
3.Sc-ed	4 3 4 5　3 4 3 4　5 3 4 3　4 3 4 5	3 4 3 4　5 4 3 4　3 5 4 3　4 3 5 4	3 5 3 5　4 3 5 4　3 4 3 4　3 4 5 4	3 4　3 4　3 5 4 5　4 5 4 3
4.Pu-ed		5　4 5 4 3	4　5 3 5　3	
	4 3 4 5　3 4 3 4　5 3 4 3　4 3 4 5	3 4 3 4　5 4 3 4　3 5 4 3　4 3 5 4	3 5 3 5　4 3 5 4　3 4 3 4　3 4 5 4	3 4　3 4　3 5 4 5　4 5 4 3
5.Do-ed		5　4	4	
	5 3 4 5　3 4 3 4　5 3 4 5　4 3 4 5	3 4 3 4　5 4 3 4　3 5 4 3　4 3 5 4	3 5 3 5　4 3 5 4　3 4 3 4　3 4 5 4	3 4 3 4　3 4 3 4　3 5 4 5　4 5 4 3
6.De-ed	4 3 4 5　3 4 3 4　5 3 4 3　4 3 4 5	3 4 3 4　5 4 3 4　3 5 4 3　4	3 5 3 5　4 3 5 4　3 4 3 4　3 4 5 4	3 4 3 4　3 4 3 4　3 5 4 5　4 5 4 3
7.Co-ed	5 3 4 5　4 5 3 4　5 4 5 3　4 3 4 5	4 5 3 4　5 4 3 5　4 5 4 3　5 3 5 4	3 5 3 5　4 3 5 4　3 5 3 5　3 4 5 4	3 5 3 5　3 5 3 5　3 5 4 5　4 5 4 3
8.Fr-ed	4 3 4 5　4 5 3 4　5 4 5 3　4 3 4 5	4 5 3 4　5 4 3 5　4 5 4 3　4 3 5 4	3 5 4 5　4 3 5 4　3 5 3 4　3 4 5 4	3 5 3 5　3 4 3 4　3 5 4 5　4 5 4 3
9.Br-ed	5			4　4
	4 3 4 5　3 4 3 4　5 3 4 3　4 3 4 5	3 4 3 4　5 4 3 4　3 5 4 3　4 3 5 4	3 4 3 5　4 3 5 4　3 4 3 5　3 4 5 4	3 5 3 4　3 5 3 4　3 5 4 5　4 5 4 3
10.Ca-ed	4 3 4 5　4 5 3 4　5 4 5 3　4 3 4 5	4 5 3 4　5 4 3 5　4 5 4 3　4 3 5 4	3 5 4 5　4 3 5 4　3 5 4 5　3 4 5 4	3 5 3 5　3 5 3 5　3 5 4 5　4 5 4 3
11.Pe-ed		(5　4)		
	4 3 4 5　3 4 3 4　5 3 4 3　4 3 4 5	3 4 3 4　5 4 3 4　3 5 4 3　4 3 5 4	3 5 4 5　4 3 5 4　3 4 3 4　3 4 5 4	3 4　3 4　3 5 4 5　4 5 4 3
12.Pa-ed				
(chopin)	4 3 4 5　3 4 3 4　5 3 4 3　4 3 4 5	3 4 3 4　5 4 3 4　3 5 4 3　4 3 5 4	3 5 3 5　4 3 5 4　3 4 3 4　3 4 5 4	3 4 3 4　3 4 3 4　3 5 4 5　4 5 4 3
13.Kr-ed		4	5 4	
	5 3 4 5　4 5 3 4　5 3 4 3　4 3 4 5	5 3 4　5 4 3 5　4 5 4 3　4 3 5 4	3 5 4 5　4 3 5 4　3 4 3 4　3 4 5 4	3 4 3 4　3 4 3 4　3 5 4 5　4 5 4 3
14.Ig-ed	5 3 4 5　4 5 3 4　5 3 4 3　4 3 4 5	4 5 3 4　5 4 3 5　4 5 4 3　5 3 5 4	3 5 3 5　4 3 5 4　3 4 3 4　3 4 5 4	3 5　3 5　3 5 4 5　4 5 4 3
15.Ze-ed	4 3 4 5　3 4 3 4　5 3 4 3　4 3 4 5	3 4 3 4　5 4 3 4　3 5 4 3　4 3 5 4	3 5 4 5　4 3 5 4　3 4 3 4　3 4 5 4	3 4　3 4　3 5 4 5　4 5 4 3
16.Sk-ed	5			5 3 5
(chopin)	4 3 4 5　3 4 3 4　5 3 4 3　4 3 4 5	3 4 3 4　5 4 3 4　3 5 4 3　4 3 5 4	3 5 3 5　4 3 5 4　3 4 3 4　3 4 5 4	3 4 3 4　3 4 3 4　3 5 4 5　4 5 4 3
17.Ya-ed(chopin)	4 3 4 5　3 4 3 4　5 3 4 3　4 3 4 5	3 4 3 4　5 4 3 4　3 5 4 3　4 3 5 4	3 5 3 5　4 3 5 4　3 4 3 4　3 4 5 4	3 5 3 4　3 4 3 4　3 5 4 5　4 5 4 3
18.Zi-ed				3 5
(chopin)	4 3 4 5　3 4 3 4　5 3 4 3　4 3 4 5	3 4 3 4　5 4 3 4　3 5 4 3　4 3 5 4	3 5 3 5　4 3 5 4　3 4 3 4　3 4 5 4	3 4 3 4　3 4 3 4　3 5 4 5　4 5 4 3
19.Ek-ed	5　4 5　4 5 4　5	4 5　5　4　5	4　5　5	5 4 5　5 4 5
(chopin)				5 4 5
	4 3 4 5　3 4 3 4　5 3 4 3　4 3 4 5	3 4 3 4　5 4 3 4　3 5 4 3　4 3 5 4	3 5 3 5　4 3 5 4　3 4 3 4　3 4 5 4	3 4 3 4　3 4 3 4　3 5 4 5　4 5 4 3
20.Az-ed	4 3 4 5　3 4 3 4　5 3 4 3　4 3 4 5	3 4 3 4　5 4 3 4　3 5 4 3　4 3 5 4	3 5 3 5　4 3 5 4　3 4 3 4　3 4 5 4	3 4 3 4　3 4 3 4　3 5 4 5　4 5 4 3

表2ー3

	op.10 No.3 第1小節目から第4小節目（右手上声部）				
Ⅰ.Ae	未確認				
Ⅰ.A	記載なし				
Ⅱ.FE2	記載なし				
Ⅲ.FE-D	書き込みなし				
Ⅳ.FE-S	書き込みなし				
Ⅴ.FE-J	書き込みなし				
Ⅵ.GE-Z	書き込みなし				
1.Kl-ed	5 3 54	4 5	5 4 5 5	4 5 3 5	
2.Mi-ed	2 4 3 4 54	5	5 4 5	5 4 3 4 5	
3.Sc-ed	2 5 3 4 54	4	5 4 3 5 5	5 4 2 3 4	
4.Pu-ed	3 4		5 5	5 4 3 4	
5.Do-ed	5 3 4 54	4 5	5 4 5 5	5 3 4	
6.De-ed	2 4 5	4 5	5 4 5 5	5 4 3 4	
7.Co-ed	2 5 3 4 5	5 4 5	5 5 3 5 5	5 45 3 4 5	
8.Fr-ed	2 4 3 4 54	5 4 5	5 4 5 4 5	5 45 3 4 5	
9.Br-ed	5 3 4 5	4 4	5 4 5 5	4 35 3 4 5	
10.Ca-ed	2 5 3 4 5	5 5 4	5 5 3 5 5	5 45 3 4 5	
11.Pe-ed	2 5 3 4 54	4	5 5 4 5 5	5 4 2 3 4	
12.Pa-ed	2 5 3 4 5		5 4	5 45 3	
(chopin)					
13.Kr-ed	5 4 5 5	5 5 5 5	5 5	5 4 4 5 5	
14.Ig-ed	2 5 3 4 54	4	5 5 4 5 5	5 4 3 4 5	
15.Ze-ed	2 5 3 4 54	4	5 5 4 5 5	5 4 2 3 4	
16.Sk-ed	2 5 3 4 54			45 4 2 3 4	
(chopin)					
17.Ya-ed(chopin)					
18.Zi-ed	2 5 3			5	
(chopin)					
19.Ek-ed	2 3	4 5	5 4 3 5	5 4 2 3 4	
(chopin)					
20.Az-ed	2 4 3 4 54		5 4 5	5 4 3 4 5	
(chopin)					

表2ー4

	op.10 No.4 第1小節目、第2小節目（右手上声部）						
Ⅰ.Ae	記載なし						
Ⅱ.FE2	記載なし						
Ⅲ.FE-D	書き込みなし						
Ⅳ.FE-S		1	1	1		1 3 2	
Ⅴ.FE-J	書き込みなし						
Ⅵ.GE-Z	5 4 3 2	5 3 1 2	3 4 2 3	1 4 2 1	2 3 1 2	3 4 2 5	2 3 2 5 1 2 1 5 1 2 1 5
1.Kl-ed		1	1	1	1	2	1 3 2 1 3 2 1 3 2
2.Mi-ed		3 1	1	1	1	3	2 2 1 3 2 1 3 2
3.Sc-ed	5	3 1	4 1	1	1	2 5	1 3 2 5 1 3 2 1 3 2
4.Pu-ed	5	1	4 2 3	1 4 2 1	2 3 1	5	2 3 2 5 1
5.Do-ed		3 1	1	1	1		2 3 2 1 3 2 1 3 2
6.De-ed	5	3 1 2	4 1 2	1 2	1	3 2	1 3 2 5 1 3 2 1 2 1
7.Co-ed	5 4 3 2	5 3 1 2	3 4 1 2	3 4 1	1	3 4 2 5	1 3 2 5 1 3 2 5 1 2 1
8.Fr-ed		3 1	1	1	1	3 4 2	1 3 2 1 3 2 1 2 1
9.Br-ed	5	3 1	4 1	1	1	2 5	1 3 2 5 1 3 2 1 3 2
10.Ca-ed	5	3 1	4 1 2	1 2	1 2	2 5	1 3 2 5 1 3 2 1 2 1
11.Pe-ed	5	3 1	4 1	1	1	5	2 3 2 5 1 2 1 1 2 1
12.Pa-ed						2	1 3 2 1 3 2
(chopin)		1	1	1			1 3 2
13.Kr-ed	2	1 2	3 2 3	1 4 2 1	2 3	3	2 1 1 2
14.Ig-ed	5	3 1	4 1	1	1	2 5	1 3 2 5 1 3 2 1 2 1
15.Ze-ed	5	3 1	4 1	1	1	5	2 3 2 5 1 2 1 1 2 1
16.Sk-ed						1 3 2	1 3 2 1 3 2
(chopin)						3 4 2	
(chopin)		1	1	1			1 3 2
17.Ya-ed(chopin)							
18.Zi-ed		1	1	1		2	1 3 2 2
(chopin)							
19.Ek-ed			2 3	1 3 2 1	2 3	3 4	2 1 2 1
							1 3 2
(chopin)		(1)	(1)	(1)	(	1 3 2)	(1 3 2) (1 3 2)
20.Az-ed						1 3 2	
(chopin)		1	1	1			1 3 2

表2－5

	op.10 No.5 第1小節目から第4小節目（右手）			
Ⅰ.A	3 5 1　4 2 4　1 5　1 4	2 4　1 3	1　2　5 1	
Ⅱ.FE2	3 5 1　4 2 4　1 5　1 4	2　1 3	1　2　5	
Ⅲ.FE-D			4　4	4
Ⅳ.FE-S	書き込みなし			
Ⅴ.FE-J	書き込みなし			
Ⅵ.GE-Z	未確認			
1.Kl-ed	3 5 1　4 2 4　1 5 2　3 1 5	3　1 3	5 2　4 1　5 2　4 1	4 1　4
2.Mi-ed	3 5 1　4 2 4　1 5 2　3 1 4	2　1　4 2 4　1 5　1 3	1 5 2　5 1 5　1 5　5 1	1 5　5 1　2　5 1
3.Sc-ed	3 5 1　4 2 4　1 5 2　3 1 4	2 4 1　4 2 4　1 5 2　3 1 3	1 5 2　4 1　2　4 1	2　4 1 5　2　4 1 5
4.Pu-ed	3 5 1　4 2 4　1 5 2　3 1 4	2 5 1　4 2 4　1 5 2　3 1 3	1 5 2　4 1　2　4 1	2　4 1 5　2　4 1 5
5.Do-ed	3 5 1　4 2 4　1 5 2　3 1 4	2　2　1 4	1　2　4 1　2　4 1	4 1　4
6.De-ed	3 5 1　4 2 4　1 5 2　3 1 4	2　1　4 2　1 5 2　3 1 3	1　2　4 1　2　4 1	2　4 1　2　4 1
7.Co-ed	2 5 1　3 2 3　1 5 2　3 1 4	2 4 1　3 2 3　1 5 2　3 1 3	1 4 2　4 1 5　1 4 2　4 1	1 5　5 1 5　1 5 2　5 1
8.Fr-ed	3 5 1　4 2 4　1 5 2　3 1 4	2 5 1　4 2 4　1 5　1 4	1 5 2　5 1 5　1 5　5 1	1 5　5 1　2　5 1
9.Br-ed	4	4		
	3 5 1　3 2 4　1 5 2　3 1 4	2 4 1　3 2 4　1 5 2　3 1 4	1 5 2　4 1　2　4 1	2　4 1 5　2　4 1
10.Ca-ed	3 5 1　4 2 4　1 5 2　3 1 4	2 4 1　4 2 4　1 5 2　3 1 3	1 4 2　4 1　4 2　4 1	5 2　5 1 5　4 2　4 1 5
11.Pe-ed	2 4 1　4 2 4　1 5 2　4 1 4	2 4 1　4 2 4　1 5 2　4 1 4	1 5 2　4 1　2　4 1	2　4 1 5　2　4 1 5
12.Pa-ed	2 4　2　3		4　5　1 5 2　4	1 5 2　4　2　4 1 5
(chopin)	3 5 1　4 2 4　1 5　1 4	2　1 3	1　2　5 1	
13.Kr-ed	5　3			
	2 4 1　4 2 4　1 5 2　3 1 4	2 4 1　4	1　2　1　2　1	
14.Ig-ed	3 5 1　4 2 4　1 5 2　3 1 4	2 5 1　4 2 4　1 5 2　3 1 3	1 5 2　4 1 5　2　4 1	2　5 1 5　2　5 1 5
15.Ze-ed	3 5 1　4 2 5　2 5 1　3 1 4	2 4 1　4 2 5　2 5 1　4 1 3	1 5 2　4 1　2　4 1	2　4 1 5　2　4 1 5
16.Sk-ed	2　3		5　1 5 2	1 5 2　2　4 1 5
(Dubois)			4　4	4
(chopin)	3 5 1　4 2 4　1 5　1 4	2　1 3	1　2　5 1	
17.Ya-ed(chopi)	3 5 1　4 2 4　1 5　1 4	2　1 3	1　2　5	
18.Zi-ed			4　4	
(chopin)	3 5 1　4 2 4　1 5　1 4	2　1 3	1　2　5	
19.Ek-ed	2 4　5　3	4		
(chopin)			(4)　(4)	(4)
(chopin)	3 5 1　4 2 4　1 5　1 4	2 4　1 3	1　2　5 1	
20.Az-ed	2	1　4 2 4　1 5		
(chopin)			4　4	4
(chopin)	3 5 1　4 2 4　1 5　1 4	2　1 3	5 1	

表2－6

	op.10 No.6 第1小節目、第2小節目（左手上声部）	
Ⅰ.A	2 1 3	
Ⅱ.FE2	2 1 3 1 2 4	
Ⅲ.FE-D	書き込みなし	
Ⅳ.FE-S	書き込みなし	
Ⅴ.FE-J	書き込みなし	
Ⅵ.GE-Z	書き込みなし	
1.Kl-ed	2 1 3 1 2 4	2 1　4　2　2 1 2
2.Mi-ed	2 1 3 1 2 4	2 1
3.Sc-ed	2 1 3 1 2 4	2　4　2　2 1 2
4.Pu-ed	2 1 3 1 2 4	2　4　2　3
5.Do-ed	2 1 3 1 2 4	2 1　4　2
6.De-ed	2 1 3 1 2 4	2 1 3　3
7.Co-ed	2 1 3 1 2 4	1 2 3 2 1 4　1　1 2
8.Fr-ed	2 1 3 1 2 4	2 1　3
9.Br-ed	2 1 3 1 2 4	1 2 3　4　1　2 1 2
10.Ca-ed	2 1 3 1 2 4	2　4　2　2 1 2
11.Pe-ed	2 1 3 1 2 4	2　4　2　2 1 2
12.Pa-ed		2
(chopin)	2 1 3 1 2 4	3
13.Kr-ed	2 1 2 1 2 4	1 2 3 2 1 4　3
14.Ig-ed	2 1 3 1 2 4	1 2 3 2 1 4　1 2 3 2 1 2
15.Ze-ed	2 1 3 1 2 4	2　4　2　2 1 2
16.Sk-ed		2
(chopin)	2 1 3 1 2 4	3
17.Ya-ed(chopin)	2 1 3 1 2 4	1 2 3 2 1 4
18.Zi-ed		2
(chopin)	2 1 3 1 2 4	
19.Ek-ed		2　3
(chopin)	2 1 3 1 2 4	
20.Az-ed		
(chopin)	2 1 3 1 2 4	3

表2ー7

	op.10 No7 第1小節目、第2小節目（右手上声部）		
Ⅰ.A	未確認		
Ⅱ.FE2	3 5 3 5　　4 5		
Ⅲ.FE-D	書き込みなし		
Ⅳ.FE-S	書き込みなし		
Ⅴ.FE-J	書き込みなし		
Ⅵ.GE-Z	書き込みなし		
1.Kl-ed	3 5 3 5　　4 5	3	
2.Mi-ed	3 5　　4 5		
3.Sc-ed	4	3 5 3 5　　4 5	3 5　　4 5
4.Pu-ed	3 5 3 5　　4 5	3 5　　4 5	
5.Do-ed	3 5 3 5　　4 5		
6.De-ed	4	3 5 3 5 3　3　3　4 5	3　3　3　3　3　4 5
7.Co-ed	1	3 5 3 5 3 5　3 5 3 5 4 5	3
8.Fr-ed	3 5　　4 5		
9.Br-ed	4	3 5 3 5　　4 5	3 5　　4 5
10.Ca-ed	4	3 5 3 5　　4 5	3 5　　4 5
11.Pe-ed	3	3 5 3 5　　4 5	3 5　　4 5
12.Pa-ed (chopin)	3 5 3 5　　4 5		
13.Kr-ed	3 5 3 5 3 5　　4 5		
14.Ig-ed	3 5 3 5　　4 5	3 5　　4 5	
15.Ze-ed	4	3 5 3 5　　4 5	3 5　　4 5
16.Sk-ed (chopin)	3 5 3 5　　4 5		
17.Ya-ed(chopin)	3 5 3 5　　4 5		
18.Zi-ed (chopin)	1	3 5 3 5　　4 5	
19.Ek-ed (chopin)	3 5 3 5　　4 5		
20.Az-ed (chopin)	3 5 3 5　　4 5		

表2ー8

	op.10 No.8 冒頭トリルと第1小節目、第2小節目（右手）		
Ⅰ.A	記載なし		
Ⅱ.FE2	4　4　4		
Ⅲ.FE-D	1 3		
Ⅳ.FE-S	書き込みなし		
Ⅴ.FE-J	書き込みなし		
Ⅵ.GE-Z	未確認		
1.Kl-ed	3	4　4　4	2　4 1　2
2.Mi-ed	2　1 2	5 4 3 1　4　4	1　1　1
3.Sc-ed	1 3　2 1	4　4　4　4	2　1　2　1　1　2
4.Pu-ed		4　4　4　4	2　1　2　1　1　2
5.Do-ed	1 3　2 1	4　4　4	2　4 1　2　1　1
6.De-ed	1 3　2 1	4　4　4	2　1　2　1　1
7.Co-ed	23132 1 2	5 3 2 1　4 3 2 1　4　4	2 3 4 1　2 3 5 3
8.Fr-ed	13231 2 1	4 3 2 1　4 3 2 1　4　4	2 3 4 1　2 3 4 1　1　2 3 4 3
9.Br-ed	13243 2 1	4　4　4　4	2　1　2　1　1　2
10.Ca-ed	1 3　2 1	4　4　4　4	2　1　2　1　1　2
11.Pe-ed	1 3　2 1	4　4　4　4	2　1　2　1　1　2
12.Pa-ed (chopin)		4　4　4	1
13.Kr-ed	1 3　2 1	4　1　4	2　4
14.Ig-ed	1 3　2 1	4　4　4　4	2　1　2　1　1　2
15.Ze-ed	1 3　2 1	4　4　4　4	2　1　2　1　1　2
16.Sk-ed	2 1		1
(Dubois)	1 3		
(chopin)		4　4　4	
17.Ya-ed(chopin)		4　4　4	
18.Zi-ed (chopin)		4　4　4	
19.Ek-ed	2 1		
(chopin)	(13)	4　4　4	
20.Az-ed	2 1		
(chopin)	1 3	4　4　4	

表2－9

	op.10 No.9 第1小節目、第2小節目（左手）	
Ⅰ.Ae	未確認	
Ⅰ.A	5 4　4　4　5 4	
Ⅱ.FE2	5 4　4　4　5 4	
Ⅲ.FE-D	書き込みなし	
Ⅳ.FE-S	書き込みなし	
Ⅴ.FE-J	書き込みなし	
Ⅵ.GE-Z	書き込みなし	
1.Kl-ed	5 4 1 4 1　　5 4 1	
2.Mi-ed	5 4　4　4　5 4	
3.Sc-ed	5 4 1 4 1 4　　4 1　1	4 1　1　　4 1　1
4.Pu-ed	5 4 1 4 1 4　　4 1　1	4 1　1　　4 1　1
5.Do-ed	5 3　3　3　5 4	4　3　3
6.De-ed	5 4　4　4　5 4	
7.Co-ed	5 3 1 4 1 3　5 3 1 4 1 3	5 3　4　3　3 1 4　3
8.Fr-ed	5 4　4　4　5 4	
9.Br-ed	5 3 1 3 1　　3 1 4 1	3 1　1　　3 1　1
10.Ca-ed	5 3 1 4 1 3　　3 1 4 1 3	3 1 4 1 3　3 1 4 1 3
11.Pe-ed	5 3 1 3 1 3　　3 1　1	3 1　1　　3 1　1
12.Pa-ed	3　　3	
(chopin)	5 4　4　　5 4	
13.Kr-ed	2 1 5 1 5　　3　5　5	5 3　5　5　2　5
14.Ig-ed	5 3 1 4 1 3　　3 1 4 1 3	3 1 4 1 3　3 1 4 1 3
15.Ze-ed	5 3 1 4 1 4　　4 1　1	4 1　1　　4 1　1
16.Sk-ed	(2) 4　　4	4
		(2)
(chopin)	5 4　4　　5 4	
17.Ya-ed(chopin)	5 4　4　4　5 4	
18.Zi-ed		
(chopin)	5 4　4　4　5 4	
19.Ek-ed	3　4　3　　3　4　3	
(chopin)	5 4　4　4　5 4	
20.Az-ed		
(chopin)	5 4　4　　5 4	

表2－10

	op.10 No.10 第1小節目、第2小節目（右手上声部）	
Ⅰ.A	1 1 5 1 5	
Ⅱ.FE	5 1 5　　1	
Ⅲ.FE-D	書き込みなし	
Ⅳ.FE-S	書き込みなし	
Ⅴ.FE-J	書き込みなし	
Ⅵ.GE-Z	書き込みなし	
1.Kl-ed	1　1　　1	
2.Mi-ed	2 1　1　　1	
3.Sc-ed	2 1 5 1 5　　1	
4.Pu-ed	1 5 1 5	
5.Do-ed	2 1　　1	
6.De-ed	1 3 5 1	
7.Co-ed	2 1 5 1 5	
8.Fr-ed	2 1　1　　1	
9.Br-ed	2 1 5 1 5	
10.Ca-ed	2 1 5 1 5　　1	
11.Pe-ed	2 1 5 1 5　　1	
12.Pa-ed	1	
(chopin)	1 5 1 5　　1	
13.Kr-ed	2 1　1	
14.Ig-ed	2 1 5 1 5 1　　1	
15.Ze-ed	2 1 5 1 5　　1	
16.Sk-ed	2	
(chopin)	1 1 5 1 5　　1	
17.Ya-ed(chopin)	1 1 5 1　　1	
18.Zi-ed		
(chopin)	1 1 5 1 5　　1	
19.Ek-ed		
(chopin)	1 1 5 1 5　　1	
20.Az-ed		
(chopin)	5　5　　1	

表2ー11

	op.10 No.11 第1小節目から第4小節目（右手上声部）				
Ⅰ.A		未確認			
Ⅱ.FE		記載なし			
Ⅲ.FE-D		書き込みなし			
Ⅳ.FE-S		書き込みなし			
Ⅴ.FE-J		書き込みなし			
Ⅵ.GE-Z		書き込みなし			
1.Kl-ed	4	4 3	4 3		
2.Mi-ed		4	4 5 4		
3.Sc-ed	3	4 3	4 3		
4.Pu-ed					
5.Do-ed	4	4 3 4 5 4	4 3		
6.De-ed	3	5 4 3 4 5 4	4 3		
7.Co-ed	3	4 3 4 5 4	4 3 4 5	5 5 5	5 5 5
			(5 4)	2	
8.Fr-ed	3	5 4 3 4 5	4 5 4		5
9.Br-ed	3	4 3	4 3	5 5 5	
10.Ca-ed	3	4 3 4 5 4	4 3 4	5 5	5 5 5
11.Pe-ed	3	4 3	4 3		
12.Pa-ed	3	4 3 3	4 3		
(chopin)					
13.Kr-ed	4	4 3 4 4	4 3 4 5 4		
14.Ig-ed	3	5 4 3 4 5	4 3 4 5	5 5 5	5 5 5
15.Ze-ed	3	4 3	4 3		
16.Sk-ed	3	4 3 3	4 3		
(chopin)					
17.Ya-ed		(4 3 3)			
(chopin)					
18.Zi-ed		4 3 (4)	4 (4)		
(chopin)					
19.Ek-ed	3	$\frac{5\ 4\ 54}{4\ 3\ 4}5\frac{4}{3}$	$\frac{5\ 4\ 54}{4\ 3\ 4}5\frac{4}{3}$		
(chopin)					
20.Az-ed		4			
(chopin)					

表2ー10

	op.10 No.12 第1小節目、第2小節目（左手）				
Ⅰ.A	未確認				
Ⅱ.FE2	2 1 2 4 3 1 2 4 3 1			2 5	
Ⅲ.FE-D	書き込みなし				
Ⅳ.FE-S	書き込みなし				
Ⅴ.FE-J	書き込みなし				
Ⅵ.GE-Z	未確認				
1.Kl-ed	3 1 2 4 3 1 2 4 3 1			2 5 2 5 1 4 2 4	
2.Mi-ed	2 1 2 4 3 1 2 4 3 1			2 5	
3.Sc-ed	2 1 2 4 3 1 2 4 3 1 1	1 1		2 5 1 5 2 5 1 5	3
4.Pu-ed	2 1 2 4 3 1 2 4 3 1 1	1 1		2 5	3
5.Do-ed	2 1 2 4 3 1 2 4 3 1			2 5 2 5 1 4	
6.De-ed	2 1 2 4 3 1 2 4 3 1 2 4 1	2 1 1		2 5	
7.Co-ed	2 1 2 4 3 1 2 4 3 1 2	2 2 1		2 5 1 5 2 5 1 3	1
8.Fr-ed	3 1 2 4 3 1 2 4 3 1			2 5	1
9.Br-ed				5 2 5 1 5	3
	3 1 2 4 3 1 2 4 3 1 1	1 1		2 5 1 3 1 3 1 3	1
10.Ca-ed	2 1 2 4 3 1 2 4 3 1 1	1 1		2 5 1 5 2 5 1 5	3
11.Pe-ed	2 1 2 4 3 1 2 4 3 1 1	1 1		2 5 2 5 2 2	3
12.Pa-ed					
(chopin)	2 1 2 4 3 1 2 4 3 1			2 5	
13.Kr-ed	(2 1 2 4 3 1 2)				
	2 3 1 3 2 3 1 3			1 4	
14.Ig-ed	2 1 2 4 3 1 2 4 3 1 2 1	2 1 2 1		2 5 1 5 2 1	3
15.Ze-ed	2 1 2 4 3 1 2 4 3 1 1	1 1		2 5 1 5 2 1	3
16.Sk-ed					
(chopin)	2 1 2 4 3 1 2 4 3 1			2 5	
17.Ya-ed(chopin)	2 1 2 4 3 1 2 4 3 1			2 5 1 2 1	
18.Zi-ed				1 2 1	
(chopin)	2 1 2 4 3 1 2 4 3 1			2 5	
19.Ek-edr					
(chopin)	2 1 2 4 3 1 2 4 3 1			2 5	
20.Az-ed					
(chopin)	2 1 2 4 3 1 2 4 3 1			2 5	

4．考察

4．1．ショパンの指使いと校訂者の指使い

3.で示した指使い一覧表を基に、ショパンの指示による指使いが、ショパンの没後に出版されたエディションではどのように使用され、また変化したのかを具体的に考察する。ショパンの最終的な意図に沿ったⅡ.FE2または生存中の楽譜に記されている指使いと比較して、エディションによって多様性が見られた曲を取り上げる。

4．1．1.《Etude　op.10 No.2》

第1小節冒頭a音の指使いは第4指と第5指の2つに分かれる。ショパンと同じ第4指を指示しているのは計13冊である。ショパンと異なる第5指を指示しているのは、5.Do-ed、7.Co-ed、13.Kr-ed、14.Ig-edの4冊、両方が書かれているのは9.Br-ed、16.Sk-ed、19.Ek-edの3冊である。

第1小節2拍目のcis音にショパンは第3指を指示しているのに対し、7.Co-ed、8.Fr-ed、10.Ca-ed、13.Kr-ed、14.Ig-edの計5冊のエディションで第4指を指示している。19.Ek-edでも校訂者は第４指を提案しており、ショパンの指使いと共に示されている。

ショパンは黒鍵に第3指を多用している。最初の2小節間で12回使用するのに対して、7.Co-edは8回、19.Ek-edの校訂者は7回で、その代わりに第４指が使われている。

表中、すべてショパンの指示通りの指使いを示すエディションは1.Kl-ed、2.Mi-ed、3.Sc-ed、12.Pa-ed、15.Ze-ed、17.Ya-ed、18.Zi-ed、20.Az-edの計8冊で、ショパンと校訂者の2種類が示されるものは4.Pu-ed、9.Br-ed、11.Pe-ed、16.Sk-ed、19.Ek-edの5冊である。6.De-edはショパンの指使いから省略が見られる。また、ショパンとは異なる指使いを指示するエディションのうち校訂者の指示がすべて一致するものは8.Fr-edと10.Ca-edだけであり、他のものはわずか一箇所でも違いがみられた。これ程までに指使いは多様に考え出されている。

このEtudeはさらに微妙な問題を持っている。第４小節第１拍はⅡ.FE2において2つの指使いが指示されている。１つは第3指-第4指-第3指-第4指で、1.Kl-edをはじめとする多くのエディションが採用もしくは一部の省略を伴って採用している。12.Pa-ed以降のショパンと校訂者の指使いを分けて記載しているエディションにおいても、ショパンの指使いとして示されるのはやはり第3指-第4指-第3指-第4指である。もう一方の第5指-第4指-第5指は20冊のいずれにも見られない。隣合った白鍵でありながら第5指の上を第4指が乗り越えるという指使いは一般的な指使いとして受け入れられない、という考え方が共通認識だったのではないだろうか。ショパンの最終的な意図はわからない。

またこれに比較してⅡ.FE2の校正版であるⅠ.Pにはc音-h音-c音に対して第5指-第4指-第5指が指示されているというように、ずれが生じている。この箇所に関してはどの原典版においても、第5指で始まるⅡ.FE2の指使いは見られず、唯一19.Ek-edのみがⅠ.Pの指使いをショパンの２番目の指使いとして採用している。また17.Ya-edではこの部分だけショパンの指示が一貫されていない。このように資料研究が進むにつれて、ショパンの意図を再現する原典版においても示される指使いに変化が生じている。

4．1．2.《Etude op.10 No.4》

このEtudeにおいてショパンはⅡ.FE2を出版した時点では冒頭部分に指使いを指示していない。しかし、弟子Stirlingの楽譜には書き込みが見られる。

Ⅳ.FE-Sの第1小節では3箇所に第1指が指示されているが、1つ目は白鍵、2つ目と3つ目は黒鍵である。しかし同じショパンの弟子でありながら、Ⅵ.GE-Zの楽譜では黒鍵には第2指を用いる指使いとなっている。Ⅵ.GE-Zはショパンによる筆跡ではないため比較するには適していないが、Ⅵ.GE-Zと同じく黒鍵に第1指を使わない傾向を示すエディションは4.Pu-edと13.Kr-edである。19.Ek-edはⅣ.FE-Sの指使いをショパンの指使いとして示し、さらに校訂者の指使いとしてⅥ.GE-Zに近い指使いを指示している。

また第2小節第2拍ではⅣ.FE-S において、fis音-gis音-fis音に対して第1指-第3指-第2指の指使いが指示されており、第1小節と同様に黒鍵に第1指が指示されている。これに対してⅥ.GE-Zでは黒鍵が第2指となっており、先の例で示した4.Pu-edと13.Kr-ed以外に、2.Mi-ed、5.Do-ed、11.Pe-ed、13.Kr-ed、15.Ze-edを含む計７種類のエディションが第2指を指示している。ショパンがⅡ.FE2に指使いを指示していない場合、校訂者はショパンの弟子等からの伝聞以外にショパンの指使いを知ることは出来なかったと推察される。そのため指使いは歴史の中で多様性を示すが、一方で原典版の時代といえる16.Sk-ed以降に出版された原典版の楽譜では、5つのエディション中4つのエディションがⅣ.FE-Sの指使いをショパンの指使いとして示し、17.Ya-edはⅡ.FE2と同じく指示がない。そしてⅥ.GE-Zの指使いはどれもショパンのものとして取り上げられてはいない。このように資料研究が進むことによって、ここではショパン自身の指使いとして示される指使いに統一性が見られる。

4．1．3.《Etude op.10 No.5》

このEtudeは「黒鍵のエチュード」と呼ばれるよう

に、右手が全て黒鍵の音で作曲されている。そのせいか、ショパンはⅠ.Aの時点で詳細な指使いを指示しており、さらにⅢ.FE-Dには書き込みもしている。

第1小節冒頭のGes音は、ショパン没後も長い間ショパンの指使いである第3指が守られているが、20世紀に入ると第2指も使用され始める。第2指を指示するのは、7.Co-ed、11.Pe-ed、13.Kr-edの3冊で、12.Pa-ed、19.Ek-edでも校訂者の指使いとして指示されている。

第3小節第4音目のDes音では、Ⅱ.FE2においてショパンは第5指を指示しつつも、弟子Duboisの楽譜（Ⅲ.FE-D）には第4指を書き込んでいる。ショパンの第5指を示すエディションは、同じショパンの弟子であるMikuliの2.Mi-edと8.Fr-ed 2 冊のみであり、Ⅲ.FE-Dに書き込まれた第4指は、1.Kl-ed、3.Sc-ed、4.Pu-ed、5.Do-ed、6.De-ed、7.Co-ed、9.Br-ed、10.Ca-ed、11.Pe-ed、13.Kr-ed、14.Ig-ed、15.Ze-edの合計12のエディションで指示されている。このように弟子の楽譜へ書き込んだものが、一般的に使いやすく圧倒的に支持される場合もあるということがわかる。また12.Pa-ed、16.Sk-ed、18.Zi-ed、19.Ek-ed、20.Az-edでは両方書かれている。このうち16.Sk-edはDuboisの楽譜と明記しているが、19.Ek-ed、20.Az-edではどちらもショパンの指使いとして記されている。また12.Pa-edと18.Zi-edでは、第5指がショパンの指示で第4指は校訂者の指示とされている。受け止める我々の視点では、同じ指使いでありながら校訂者による指示は作曲者からの変更とみなし、原典版においてショパンの指使いと示された場合は、作曲者オリジナルの指使いとしてみなすことになる。

4．1．4.《Etude op.10 No.9》

このEtudeでショパンは左手の書法の拡張を試みている。左手伴奏部分の冒頭f音-c音の2つの音に対して、ショパンはⅠ.A、Ⅱ.FE2共に、第5指-第4指を指示している。この完全5度音程を第5指-第4指で弾くのはかなり離れているため、第5指-第3指に変更したエディションが計7冊あり、12.Pa-ed、 19.Ek-edでは第3指を校訂者の指使いとして追加している。さらに13.Kr-edと16.Sk-edは第2指を提案している。このように、校訂者の指使いを示すエディションの数がショパンの指使いを示すエディションを上回っている場合もある。

第1小節第2、3、4拍においてもショパンは第 4 指の指示を徹底させている。これはショパンにとっての技術の進化への試みであるかもしれない。また親指が第5、6拍目で離れていく時に使うことになる第4指を、保続音C音に置き続ける指として統一したとも推察される。しかし多くの校訂者は別の指使いに変更するなど、弾き辛い音型に対応するための工夫がみられ、1拍目と同様に、校訂者の指使いを示すエディションの数がショパンの指使いを示すエディションを上回っている。4拍目まで第4指を全て第3指に変更したのは、11.Pe-edのみで、5.Do-ed以降の殆どが2拍目を第4指、3拍目を第3指というように、指の差し換えに変更している。19.Ek-edは後者を校訂者の指使いとして示している。

4．1．5．まとめ

全曲を通して、ショパンによる指使いの指示は少ない。何も書かれていないもの、部分的にしか示されないものに対して、校訂者たちはむしろ必要にせまられて指使いを書き加えていったのではないだろうか。ショパンのEtudesはその当時、技術面において特に革新的であった。No.1のように指と指の間を大きく拡げて鍵盤の両端まで休みなくアルペジオを弾き続けたり、No.2のように右手の第3、4、5指だけで半音階の上下行を繰り返しながら第1、2指は伴奏和音を刻む。このようなパッセージはそれまでのピアノ曲にはみられない。No.3は多声部の音色を表す技術が要求され、上声部をレガートに弾くための指使いは何通りも考えられる。

各曲のそれぞれの校訂者による指使いはショパン没後100年の間に全種類が提案されている。ショパンの指示と差異が多くみられるエディションは、4.Pu-ed、5.Do-ed、7.Co-ed、8.Fr-ed、9.Br-ed、10.Ca-ed、13.Kr-ed、14.Ig-edであった。そして19.Ek-edの校訂者Ekierもショパンの指使いに対する他の選択肢の1つとして、異なる指使いを多く提案している。

ショパンの作品がピアノ奏法の歴史を大きく発展させた。しかしショパンの指使いは当時、受け継がれてきたピアノ演奏の領域の歴史の中に受け入れられず、誤解や批判を受けることもあった。より良い指使いを多くの校訂者が考えて、ショパンとは異なった指使いを書いた。そのことでショパンの作品の真意が伝えられなかったのではないだろうか。20世紀半ばより原典版が重視され、作曲者の指使いが示される現在、私たちはショパンの指使いを理解するために、ショパンの演奏法を知ることがその重要な手掛かりとなるだろう。

4．2．ショパンの演奏法と指使いの関連性

4．2．1．ピアノ・メトードの草稿にみるショパンの演奏法

ショパンは晩年に1冊のメトードを書こうと試みた。「この中で彼は自分の芸術の理論と技術についての考えを要約し、長年にわたる工夫や成功した改良とか聡明な経験の果実を託そうというつもりだった。」[7] とLisztは指摘している。これは未完成に終わった。Cortotは1936年に原稿を入手し、1949年にその全文を記したが[8]、後に省略や誤読等が判明された。1973年Eigeldingerによって、楽譜を伴う完全な形で発表され、現在私たちは

日本訳の著書でその内容を知ることができる[9]。この中でショパンの言葉によるピアノ演奏法についての考え方は次の点で21世紀の現在も新しいと感じられるだろう。

第1に、メトードの最初に記された次のことばである。「肘は白鍵の高さに、手は内側にも外側にも傾けず」[10] ポイントをまず「肘」に置くことを重要視している。ショパンは演奏する時「上腕を肩から自然にたらし、極端な低音部や高音部を弾く時以外は肘を両脇に近づけ、特別に大きな音を出す時以外は腕の重さをかけずにピアノを弾いていた」といわれている[11]。

第2に、5本の指の基本のポジションを『ホー嬰ヘー嬰トー嬰イーロ』に置いて手の位置を決めることである。長い指で黒鍵を、短い指で白鍵を押さえることで手の自然な形が活かされ、必要とされる柔軟性が得られる。「ハ長調は譜読みこそやさしいが、まったく支点がないので手を動かすには最も難しい調である」と述べている[12]。これについてCortotの秘蔵弟子であったTagliaferro[13]が「自然な手のフォーム」として黒鍵のポジションに置いた自らの手の写真を紹介している[14]。またNeigauz[15]はこのポジションから練習する意義を唱え、「ショパンがそれほど昔に生きていたにもかかわらず、彼以後（彼以前はいうまでもなく）、ハ長調に惚れ込んで〈中略〉何千の教育用の曲が書かれた」と指摘している[16]。

第3に、5本の指それぞれにおける固有のタッチの魅力を活かすべきという考え方である。指の力はそれぞれ異なっており、指の数だけ音色が違う。指の力を均等にするための多くの練習を彼は否定している。第3指は中央にあって全体の支点となる。第4指を無理矢理第3指から離そうとするのは意味がない。指の造りを利用するのだから、手首や腕も使わねばならない。「完成されたメカニズムとは美しい音を上手にニュアンスをつけて弾くことができるということだと、わたしは思う」と述べている[17]。

4．2．2．ショパンの演奏法と指使いの関連性

《No.2》を弾く時、前述の基本のポジションに指を置き、手のフォームを保ちながら平行移動させると、第3指が第５指の上を飛び越して交差するのは容易である。そしてショパンの指使いでは黒鍵に必ず支点となる第3指を置いて手を安定させている。

《No.5》では親指が黒鍵を頻繁に弾く。これは当時の演奏習慣では考えられないことであった。冒頭でショパンが第3指を指示しているのは、黒鍵上に置いた第3指を支点として基本のフォームを維持するためと考えられる。《No.4》第1小節などに第1指が弟子Stirlingの楽譜に、また《No.4》第10小節などに「1-3-2」が弟子Duboisの楽譜に指示されている。黒鍵白鍵に関わりなく同音型は同じ指に担当させて、各指の固有のタッチの音色を活かしている。

特徴的な指使いとして、隣り合った黒鍵から白鍵へ同じ指をすべらせて弾く運指法が、《No.2》第26小節目es-d音（Ⅱ.FE２）、《No.3》第6小節目Gis-A音（Ⅲ.FE-D）《No.6》第46小節目es-d（Ⅳ.FE-S）にみられる。また《No.10》冒頭では4度跳躍を第1指から第1指（Ⅱ.FE2）と指示している。その他に特徴的と思われるのは、第4指と第5指の間隔である。例えば《No.9》第1小節の左手でショパンの指示は第4指と第5指が5度開く。《No.10》第1小節の左手2分音符も第4指を維持しながら5度離れた第5指を打つような指示となっている。Etudes op.10において10度以上の広い音域の左手分散和音では第3指を音程間の中心点に置いていない。その結果第3指から第1指の間は拡がり過ぎず、第4指と第5指の間が拡がることになる。第4指を鍛えるためとも考えられるが、肘を躰から離さずに手のフォームを保ち、指を上げ過ぎずに手の他の部分を使って弾く、という独自の演奏法から生まれた指使いともいえるであろう。

ショパンの指使いについてEkierは次のように述べている。「ショパンによって提案された指使いは手のくつろぎ、柔軟さ、静穏という原理に基づき、ショパンのピアノの特質と密接に結びついている。『ショパンは指と共に考えた』という言葉は、彼の作品の特質と指使いの実現の間に相互に起きるフィードバックを最も簡潔に言い表わしたものである」[18]。

ショパンの指使いは、必要とされる手の柔軟性と5本の指固有のタッチの魅力を活かす演奏法から生まれたものである。ショパンの指使いの価値は、彼が書いた楽譜上の音符と共にあり、その指使いを用いてこそショパン演奏の芸術的展開が生まれるのであろう。

5．おわりに

初版をみると、ショパンは指使いを細かく指定してはいないことが分かる。それは何通りかの可能性があり、演奏者の自由な選択に任されているとみなされるであろう。それぞれの可能性については、４.２で述べたように校訂者たちによって示されており、楽譜にみる指使いの研究は終わったようにみえる。しかしそれ以外にも指使いの提案が見られる。

Ekierは《Etudes》の別冊『演奏上の注釈』の中で小さい手のための指使いを、また17.Ya-edの山崎は各曲に「指使いの提案」を示している。例えば10度にわたる分散和音に親指の返しを用いたり、片手で届きにくかったり維持しにくい所をもう一方の手で補うことで容易になる方法である。後者については安川加寿子がフランスよ

り帰国[19]して日本においても広められた。No.2の第2小節4拍めで、右手の下の2音を左手でとると一瞬、右手が解放されて楽に弾けるのである。このようなとり方は近代のピアノ作品を演奏する場合に必然性が高く、機能的で容易な方法として頻繁に使われるようになった。20世紀の作曲家たちがもたらした指使いともいえるだろう。19世紀のピアニストや校訂者が考えもしなかった指使いが、新しい作曲家たちの作品によって今後生まれ、それが過去の作品に用いられるようになるかもしれない。バロックも古典派もロマン派も20世紀の作品も同時に勉強する現代のピアニストたちは、自分に弾きやすい指使いを、音色を探しながら自身で見つけていくことになる。ショパンのEtudesを校訂したDebussyは、自身が作曲したEtudesに故意に指使いを付けなかった。彼はピアニストがそれぞれ自分の指使いを探し求めることを望んでいる。

しかしショパンのEtudesを学習する時は必ず、ショパンの指使いを試みる必要がある。その指使いでしか得られない音色や表情を掴むことが重要である。慣れないうちは不便に感じられるが、それがピアニストとしての技術を磨き、幅広い表現力を身につけることになる。ショパンの時代のピアノは現代のピアノに比べて鍵盤の幅が狭かったため、現在では困難な場合もあるだろう。どうしても弾きにくい場合は校訂者の指使いをいろいろ参考にする。最終的には作曲者の提案した指使いと音の効果が一致しているかを聴き比べながら決定していくことが大切である。

注

（1）1829年から1932年作曲とする文献も多くみられるが、本論ではJózef Michal Chominski; Teresa Dalila Turlo: Katalog Dziel Fryderyka Chopina, Kraków, Polskie Wydawnictwo Muzyczne, 1990, p.84を参考にした。

（2）①Maurice J. E. Brown: An index of his works in chronological order -Second Revised Edition-, Da Capo Press, New York, 1972
② Krystyna Kobylanska: Rekopisy Utworow Chopina Katalog. Kraków, Polskie Wydawnictwo Muzyczene, 1977
Krystyna Kobylanska: Frédéric Chopin. Thematisch-Bibiliographisches Werkverzeichenis. München; G. Henle Verlag, 1979
③Józef Michal Chominski; Teresa Dalila：前掲書

（3）Jan Ekier; Pawel Kaminski：『Performance Commentary and Souce Commentary （adridged)』in Ekier ed. Chopin Etudes, National Edition, Warsaw, Polskie Wydawnictwo Muzyczne, 2000, p.8

（4）Jean-Jacqurs Eigeldinger：『弟子から見たショパン増補・改訂版』(音楽之友社、2005)

（5）W. Bargiel, J. Brahms, A. Franchomme, F. Liszt, C. Reinecke, E. Rudorff：『Friedrich Chopin's Werke』(Breitkopf & Härtel, 1878～1880)

（6）Karol Mikuli (1819～1897) ポーランドのピアニスト．Kistner社のショパン作品集（1879）に師であるショパンの指示、訂正を加えた校訂を行った。ミクリ版は当時広く愛用された．

（7）Alfred Cortot：『ショパン』（新潮社、昭和47）p.48

（8）Alfred Cortot：前掲 pp.53～63

（9）Jean-Jacqurs Eigeldinger：前掲 pp.258～266

(10) 同上 p.258

(11) 加藤一郎：『ショパンのピアニスム』（音楽之友社、2004）p.11

(12) Jean-Jacqurs Eigeldinger：前掲 p.262

(13) Magda Taliaferro (1893～1986)ブラジル生まれフランスのピアニスト。教育者として多くの弟子を育成。

(14) 田村安佐子：『ピアニストへの基礎』（筑摩書房,1990）p.59

(15) Genrikh Neigauz (1888～1964)ロシアのピアニスト

(16) G. Neigauz：『ピアノ演奏芸術について』（音楽之友社、昭和40） p.99

(17) Jean-Jacqurs Eigeldinger：前掲p.262

(18) Jan Ekier, Pawel Kaminski：前掲p.3

(19) 1939年

主要参考文献

Alfred Cortot：『ショパン』（新潮社、東京、昭和47）

Alfred Cortot：『Aspects de CHOPIN』（Éditions Albin Michel, Paris, 1980　初出 1949）

Jan Ekier; Pawel Kaminski：『Performance Commentary and Souce Commentary (adridged)』in Ekier ed. Chopin Etudes, National Edition, (Polskie Wydawnictwo Muzyczne, Warsaw, 2000)

Jean-Jacqurs Eigeldinger，米谷治郎／中島弘二訳：『弟子から見たショパン増補・改訂版』（音楽之友社、東京、2005）

Jean-Jacqurs Eigeldinger：『Chopin vu par ses élèves』(Fayard, Paris, 2006)

Józef Michal Chominski; Teresa Dalila Turlo：『Katalog Dziel Fryderyka Chopina』（Polskie Wydawnictwo Muzyczne, Kraków, 1990）

加藤一郎：『ショパンのピアニスム』（音楽之友社、東京、2004）

『音楽大辞典』（平凡社、東京、1981-1983）

引用楽譜

Alfred Casella：Chopin Studi Per Pianoforte Revisione Critico-Tecnica di Alfred Casella（Ricordi, Milano, 1946）

Alfred Cortot：Éditions de Travail des Œuvres de Chopin 12 Études op.10 （Edition Salabert, Paris, 1915）

Anton Door：Œuvres Pour Piano Par Frédéric Chopin Etudes Revus et soigneusement doigtés par Anton Door（Aug Cranz, Leipzig, 1904-1908）

Arthur Freidheim：Frederic Chopin Etudes For the Piano, Revised and Fingered by Arthur Freidheim（G. Schirmer, New York, 1916）

Attilio Brugnoli：Chopin Studi Per Pianoforte Edizione didattico-critico-comparativa a cura di Attilio Brugnoli（Ricordi, Milano, 1923-1926）Reprint版を使用

東貴良：『ショパン　エチュード集　作品10、作品25、3つの新しいエチュードNew Edition』（音楽之友社、東京、2006）

Carl Mikuli：Frederic Chopin Complete works for the piano. Book Ⅷ ETUDES. Edited and Fingered, and provided with an Introductory Note by Carl Mikuli（G. Schirmer, New York, 出版年代不詳）Chopin Complete works for the piano. Book Ⅷ ETUDES. （Kistner, Leipzig, 1879）Reprint版を使用.

Charles Klindworth：Fr. Chopin Œuvres complètes revues

Vol.1, doigtées et soigneusement corrigées d'après les éditions de Paris, Londres, Bruxelles et Leipsic par Charles KLINDWORTH（Ed. Bote & Bock, Berlin 出版年代不詳）Œuvres de Fr. Chopin. Revues, doigtées et soigneusement corrigés d'après les editions de Paris par Charles KLINDWORTH（P. Jürgenson, Moscow, 1873-1876）Reprint版を使用。

Claude Debussy：Chopin Œuvres complètes pour Piano Études Révision par Claude Debussy（Edition Durand et Cie, Pais, 1915）

Ewald Zimmermann：Frédéric Chopin Etüden URTEXT, Nach Eigenschriften Abchriften und Erstausgaben Herausgeben von Ewald Zimmermann, Fingersatz von Hermann Keller（G. Henle Verlag, München, 1983）

Herrmann Scholtz：CHOPIN Kompositionen Band Ⅱ Fr. Chopin's Sämmtliche Pianoforte -Werke. Kritisch revidirt und mit Fingersatz versehen von Herrmann SCHOLTZ（C. F. Peters, Leipzig, 1879）

Herrmann Scholtz Neue Ausgabe von Bronislaw v. Pozniak：Frédéric Chopin Etüden Kritisch revidiert von Herrmann Scholtz Neue Ausgabe von Bronislaw v. Pozniak（C. F. Peters, Frankfurt, 1948）

Ignacy J. Paderewski編：『ショパン全集』Ⅱイグナツィ・ヤン・パデレフスキ、ルドヴィク・ブロナルスキ、ユゼフ・トゥルチヌスキ編集《エチュード》（財団法人ジェスク音楽文化振興会、株式会社アーツ出版、1992）Fryderyk Chopin Dziela Wszystkie Ⅱ Etiudy Na Fortepiano, Kraków, Polskie Wydawnictwo Muzyczne ©1949 の日本語版を使用。1992年に株式会社アーツ出版より出版された。

井口基成：『世界音楽全集　ショパン集4』（春秋社、東京、1951）

Jan Ekier：Chopin Etudes Opp. 10, 25, Three Etudes Méthode des Méthode National Edition Series A Vol.2（Polskie Wydawnictwo Muzyczne, Warszawa, 2000）

Leonid Kreutzer：『ショパン＝クロイツァー 練習曲集』（音楽之友社, 東京　1977）『ショパン・ピアノ全集エチュード』東京龍吟社音楽部Reprint版を使用。

Paul Badura-Skoda：Chopin Etudes Op.10 Wiener Urtext Edition, Universal Edition（Musikverlag Ges. m. b. H & Co., K. G., Wien, 1973）

パウル・バドゥラ＝スコダ：『ウィーン原典版　ショパン　エチュード　作品10』（音楽之友社、東京、1973）

Raoul Pugno：Frédéric Chopin Études, durchgesehen und nach den überlieferten Originalen bezeichnet, Éditions revue, doigtée et nuancée d'après les traditions originales von Raoul Pugno（Universal Edition, Wien, 1902）Reprint版を使用。

山崎孝：『全音ピアノピアノライブラリー　ショパンエチュード集　作品10　原典版』（全音楽譜出版社、東京、1979）

全音楽譜出版社出版部編：『全音ピアノライブラリー　ショパンエチュード集』（全音楽譜出版社、東京、1956）